

令和 4 年 6 月 13 日現在

機関番号：32403

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12965

研究課題名（和文）「事実」の思想史：18世紀フランス経験主義の再検討

研究課題名（英文）History of Facts : A Reexamination of 18th Century French Empiricism

研究代表者

淵田 仁 (FUCHIDA, Masashi)

城西大学・現代政策学部・助教

研究者番号：00770554

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ルソーとコンディヤックを中心に18世紀における「事実」概念の位相を検討した。経験論哲学から科学的実証主義へと素朴に進歩したという思想史観を再検討することが目的であったが、本研究を通じて、現代的なポスト・トゥルースの状況が18世紀においても確認できることが判明した。とりわけ、それは宗教的かつ文学的問題においてみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

事実をめぐる議論は、歴史修正主義や現代のエビデンス主義の隆盛という形で今日のポスト・トゥルース状況を形成する一要因となっている。そもそも事実が歴史的・思想的・社会的にどのように位置づけられてきたのかを検討することは非常に重要である。以上が本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：This study examined the concept of "fact" in the 18th century, focusing on Rousseau and Condillac. The purpose of this study was to reexamine the historical view of the history of ideas as a naive progression from empiricist philosophy to scientific positivism, but it turned out that the contemporary post-truth situation can be confirmed in the 18th century. In particular, it was found in religious and literary issues.

研究分野：思想史

キーワード：啓蒙思想 事実 エビデンス 歴史記述 科学史

1. 研究開始当初の背景

本研究が目指す大きな目的は、18世紀フランス啓蒙期の学知を理論的に支えると言われる経験主義／経験論の再解釈をおこなうことに存する。この目的を果たすために、本研究では当時のフランスの言説における「事実 fait」という語の意味内容・認識論的地位を解明することを目指した。つまり、いかなる条件において観察や実験から得られた所与のものが「事実」となり、その「事実」にはいかなる認識論的地位や理論的根拠が付与されるのかを具体的に明らかにすることを目指した。この作業によって、19世紀の実証主義を準備することになった18世紀フランス経験主義がどのような論争空間のなかから生じたかが実証的に明らかとなるだろう。まずは本研究の学術的背景と問いを二点あげる。

各フィロゾフたちは事実や経験に基づくというテーゼを多様な意味で用いており、彼らのあいだでは正当性としての事実をどのように認定するかという論争があったと言える。この点を解明することで、合理主義から経験主義へという単線の哲学史を批判的に再検討できると申請者は考えた。

1-a. 現代的な観点からの問題意識

数年前から、「ポスト・トゥルース Post-truth」という言葉が世界中で話題となっている。この言葉が象徴するように、真実とは作られたものだ 事実の正しさよりも感情に訴えることが重要だ といった考えが日常生活から政治空間に至るまで行き渡っている。このような知的態度が話題になるためには、真実 や 事実 に対して私たちが持つ信頼がまずもって存在しなければならない。すなわち、確かな知とは事実に基づいていなければならない という漠とした信念が私たちの世界で共有されているがゆえに、「ポスト・トゥルース」現象が生じているのである。ゆえに、ある事柄がいかに事実となるのか という問題を思想的に論じることは現代の私たちにとっても重要である。

1-b. 思想史上の問題意識

そもそも 真実とは何か 事実とは何か というポストトゥルース的問いは、哲学史における古典的問いであったのではないだろうか。確かな知とは事実に基づいていなければならない という信念が全世界的（西洋世界的）に支持されている理由のひとつに、科学主義・経験主義・実証主義の勃興を挙げることができるかもしれない。これは、17世紀から19世紀へ至る思想史を紐解けば明らかであろう。すなわち、生得観念といった普遍的原理から出発する17世紀の合理主義哲学に対して、18世紀は実験、経験といった所与の 事実 を知の基礎に据えた経験主義の時代であると理解されている。原理から事実へ という知的転回がこの18世紀を中心に生じたということは周知の事実であるといっていよい。

しかしながら、以上の思想史的理解に対しては、近年多くの異議が唱えられ始めている。18世紀への思想史の変動を捉えることに異議申し立てが生じている。本研究もこのような啓蒙研究の潮流に位置することになるだろう。その戦略の一つとして、本研究では 事実 という語に着目した。各フィロゾフたちは事実や経験に基づくというテーゼを多様な意味で用いており、彼らのあいだでは正当性としての事実をどのように認定するかという論争があったと言える。この点を解明することで、合理主義から経験主義へ という単線的哲学史を批判的に再検討で

きる。

2. 研究の目的

本研究は、**事実とは何か** という問いが18世紀フランスの言説空間においていかなる様相であったかを明らかにすることを目指した。すなわち、様々な学問領域において「**事実 fait**」という言葉がどのような知的文脈ないし理論において用いられていたかを解明する。日常的な意味で言えば、**事実** とは生じたこと、成したこと、事件、行為、問題という無数の意味を持つ、いわば **ありふれた** 言葉である。だが、「**事実**」とは単なる所与の事柄を意味するのではない。

何を事実と見なすか という暗黙の論争が18世紀フランスを覆っていたことを示す。

具体的には、ルソー、デイドロ、コンディヤックといったフィロゾーフたちを中心に、彼らの言語的实践においてこの語がいかに作用しているのか、を提示することが本研究の主眼である。もちろん、テキストそのもののコンテクストを無視して多義性を孕む語——同時に凡庸でもある語——に着目し、語の運用のレベルで議論することは一種のカテゴリーミステイクを冒す危険を孕む。しかしこの誤謬を犯してでも **事実** という語を検討することは、18世紀の思考形式を明確にする上で重要な作業である。なぜならば、啓蒙の時代は様々な学問が未分化の状態からまさに分化、ディシプリン化していこうとする学問的胎動の時代であり、各領域でのポキャブラリーの用法が定まっておらず、言葉や概念が特定の領域を越えて流通する時代であったからだ。

ゆえに、本研究は、哲学に留まらず歴史や科学の領域の言説をも同一平面上で分析の対象とした。

3. 研究の方法

本研究を実行する具体的な計画としては、まず計画の1年目に哲学的認識論、次いで2年目に自然科学的テキストにおける「**事実**」の用いられ方とそれに付随する用語の検討を実施し、そして3年目は、歴史叙述を巡る言説における「**事実**」の用いられ方を検討する予定であった。インターネットで閲覧不可の史料等はフランスで確認予定であったが、新型コロナウイルスの流行により国外での研究活動はできなかった。そのため、当初の計画から大幅に変更した。

4. 研究成果

コロナ禍のため史料調査や国外での報告は叶わなかったが、まずドゥニ・デイドロが執筆した『百科全書』項目「**事実**」に焦点を当て、そこで何が賭けられているかを明確にすることで、**事実**を巡る言説空間を広がりを知ることができた。デイドロの項目「**事実**」から、17世紀から議論されてきた考証学的方法論がある意味無効化される危機的契機をデイドロ自身が察知していたことを知ることができた。その危機とは**事実**が公共の手続きから構成されるものであるという考えからすべてが個人の信念体系へと回収されてしまう、というポスト・トゥルース的なものと言えよう。ルソーもデイドロと同様、「**事実**」と「**信念**」の問題について重要視していたことが明らかとなった。とりわけ、『エミール』に含まれている「サヴォワ助任司祭の信仰告白」でルソーはその草稿を幾度も書き直し、「**信仰告白**」における**事実性**の補強とそれによる信念改定の可能性をテキスト上で演出しようとしていたことが明らかとなった。

こうした啓蒙思想家たちの「**事実**」観を逆手に利用しようとしていた護教論者(ニコラ・ベルジエ)のテキストも本研究では研究対象とした。つまり、「**事実**」が可変的な信念体系に還元できるのだとすれば、科学的・経験的事実の理論をもってして宗教的信の**事実性**を主張できるというのがベルジエの護教論戦略であった。この議論についても研究成果として近く発表予定であ

る。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 淵田仁	4. 巻 14
2. 論文標題 事実の思想史：ディドロ執筆『百科全書』項目「事実」の分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 城西現代政策研究	6. 最初と最後の頁 55 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20566/18819001_14(2)_55	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 淵田仁
2. 発表標題 助任司祭のdistanciation：ルソー的コミュニケーションのひとつの作法
3. 学会等名 第15回神戸大学芸術学研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 FUCHIDA Masashi
2. 発表標題 Est-ce que l' article "FAIT" de Diderot est ordinaire ?
3. 学会等名 International Society for Eighteenth-Century Studies（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 永見 文雄、小野 潮、鳴子 博子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央大学出版部	5. 総ページ数 392
3. 書名 ルソー論集	

1. 著者名 淵田 仁	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 372
3. 書名 ルソーと方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------